

本山彦一「人類相食論」とモースの大森貝塚発掘

山口卓也 関西大学博物館非常勤研究員

はじめに

関西大学博物館蔵本山コレクションを形成した本山彦一（1853-1932）は、生涯を通して考古学資料の蒐集を続け、昭和7（1932）年、本山考古室を富民協会農業博物館の一室に設けたが、その「考古趣味」は有名であった（故本山社長伝記編纂委員会 1937）。関西大学博物館では、本山彦一による考古資料の蒐集や学術界への社会的貢献について、調査を続けてきた（山口 2020）が、本山彦一の「考古趣味」のはじまりは単純にモースの大森貝塚発掘に興味を持ったことだととして、その詳細な経緯を十分に解明できていなかった。

明治10（1877）年エドワード・モースが来日、東京大学の生物学教授となって大森貝塚を発掘したことに刺激されて、本山は考古学に興味を持った。当時、租税寮出仕の身分で、福澤諭吉に師事して慶應義塾に出入りし、論客としての頭角をあらわした時代でもあった。そののち、藤田組支配人などを経て、大阪毎日新聞の社長に就任する。その後、啓蒙的言論人、経済人であるに留まらず、富民協会による慈善活動、農業振興を図る農業博物館の運営などに乗り出していく。本山が考古学を趣味とするようになるのは、福澤諭吉や周辺との交流の中で思想的基盤の形成があった時期と重なり、無関係ではないと思われる。

本稿では、本山が福澤諭吉に師事した青年時代に発表した数ある論説の中で、いままで注目されずに埋もれていた「人類相食論」を紹介し、本山の学術支援の精神や精力的な社会活動にいたる契機、「考古趣味」を発現させた知的環境、科学史的な意味について論じてみたい。



写真1 本山彦一

1. エドワード・モースの大森貝塚発掘と本山彦一

本山彦一が考古学に関心を持ったのは、明治10（1877）年、エドワード・モースが大森貝塚を発掘したことに興味をもったがきっかけであった（故本山社長伝記編纂委員会1937・史前学会1929）。年齢は25歳である。

本山の大正9（1920）年の手控えには、

「明治十年、米国人モールズ氏ガ、地質学教師トシテ東京大學ニ聘セラレ、横濱ニ上陸、汽車ニテ東京ニ入ル途中、大森邊ニテ、石器時代ノ遺蹟アルヲ認メ、其翌日實地ニ於イテ発掘シタルニ、果シテ貝塚アリ。土器石器モ発見シ、當時ノ新聞紙ニ掲ゲラル。余ハソソナコトガ、

ドウシテ解ルモノカト、實ハ嘲り居タル程ナリ。然レドモ余ハ其頃ヨリコレニ関スル趣味ヲ覚ユルニ至レリ。其後其発掘品ハ上野博物館ニ陳列セラレタルヲ實見シタリ。」(故本山社長伝記編纂委員会1937p530-531)

とある。

最初は、その新聞報道にあるモースの発見に懐疑的であったが、それから「趣味」を覚えた(考古学に興味を持つようになった)こと。新聞記事を読んだあとに、発掘品を上野の教育博物館で開催された天覧展示の大森貝塚発掘品を実見したことを記す。本山の「考古趣味」の始まりは、モースの大森貝塚発掘にあったことは間違いない。

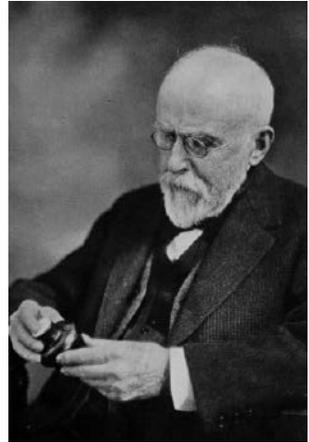


写真2 エドワード・モース

この手記で興味深いのは、本山が、新聞に掲載されたモースの発見に疑問を感じ、「余ハソナコトガ、ドウシテ解ルモノカト、實ハ嘲り居タル程」だったことである。モースが考古学の成果としていることに、「ソナコト」が「ドウシテ解ル」はずがないと嘲った本山が、その後考古学に興味を持つに至ったのは、モースが日本にもたらした生物学と考古学が、学問的に「ソナコト」を解明する手段として有効であることを理解し、その力に感銘を受けたからではなかろうか。

本山が読んだと思われるモースによる大森貝塚発掘の新聞記事は、明治10(1877)年10月6日の英字新聞にもあるが、より本山に身近であった出版物である、慶應義塾出版10月7日発行の『民間雑誌』90号収録の雑報に掲載された速報または、その記事が翌日8日『東京日日新聞』に転載されたものと思われる。

民間雑誌の雑報に掲載された大森貝塚発掘の速報は、

「開成学校お雇ひ大博士イーエス、モールス氏：米国にて一二を争ふ有名な探古學者ハ曾々汽車にて大森を經過せし時倉卒の際にて一つの小芥丘をキツ観察して其只物に非ざるを豫て疑ひ居りしが疑念勃々胸懐を離えざれば頃ろ終に其穿鑿に着手して此小芥丘発ばきければ地下凡そ一間程の所に至て太古人民の品類甕瓶瓦凡食器等を夥しく掘出したり其器物類の形状ハさも米國土人の作為せる者に似たり依々想像すれば日本太古乃人民ハ即ち米國の人民と同人種にて「アイノー」人種が先づ之を駆り除けて其「アイノー」人種を今の日本人が逐除けて此國に居住するとハなりしならんかとも云へり尚委細ハいづれモールス氏より世界乃學者達へ報道する所あるべければ其報を得て後号に掲ぐべし」(慶應義塾出版1877b)と報じた。

この速報を読んだ本山が言う「ソナコト」とは、この記事のどの部分だろうか。記事の前半は、「開成学校お雇ひ大博士」で「米国にて一二を争ふ有名な探古學者」のモースが大森辺の丘を発掘し、夥しい数の「太古人民の品類」を発掘したという事実を伝える。事実は疑えないので、この部分ではない。後半は、「其器物類の形状ハさも米國土人の作為せる者に似たり依々想像すれば日本太古乃人民ハ即ち米國の人民と同人種にて「アイノー」人種が先づ之を駆り除けて其「アイノー」人種を今の日本人が逐除けて此國に居住するとハなりしならんかとも云へり」と記して、発掘品の特徴がアメリカインディアンの遺跡発掘品と似ていることから想像すれば、日本の大昔は、日本とアメリカインディアンの「同人種」が居住していたが、その先住民族をアイヌ民族が

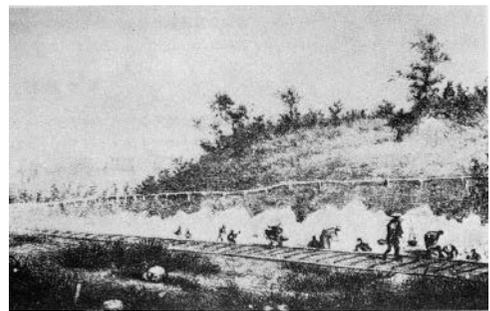
駆逐し、さらにそのアイヌ民族を今の日本人がそれを追いやって居住しているのかもしれないとのモースのコメントを引用している。いわばモースの学説の要約である。本山は、モースが貝塚で「太古人民の品類」を発掘しただけで、この学説をいきなり開陳したことに反発したのではなかろうか。

熊本藩士族本山彦一は、青年時代熊本藩藩学時習館で四書五経史記左伝を学び、明治4（1871）年12月に東京に出て、箕作秋坪の三又学舎で洋学を学んだ。三又学舎では、「パーレーの萬國史」、スミス「経済論」などを読み解き、自由に英語書籍の読解ができる能力を身につけた。その後、福澤諭吉に師事、慶應義塾へ出入りし、さらには当時の西欧人類学歴史学社会進化論を要約して「人類相食論」を発表するが、あくまで福澤諭吉門下の洋学としての勉学であった。

本稿で取り上げる本山の「人類相食論」は、まさに外国からの典籍解読で取り込んだ知識であって、日本人が自らを客観視し学問とした近代的知の結晶ではなかった。本山は明治初期の知識層日本人であったとしても、それまで日本人として身につけた記紀神話の歴史を前提に、「神代の國」であった日本には最初から日本人が住むということが自明の理として身につけていたにちがいない。壊れた土器や貝殻の山から、日本にも民族が滅ぼされたり交代する歴史あったことがわかるという、モースの提示した新聞記事掲載の学説に、「どうして」と懐疑したのではなかろうか。身近な日本での貝塚発掘が、新しい知見をもたらすという学問の可能性を認めることが出来なかったのであろう。記事を読んだ当時の本山は、新しく流れ込んだ近代的な学問体系がえぐり出した近代的学問の「発見」と、旧弊な日本の伝統的史観の、相克の間にあったといえる。



写真3 大森貝塚碑 本山彦一発起



挿図1 大森貝塚発掘

2. モースの進化論、大森貝塚の「食人」

大森貝塚を発掘したエドワード・モースは、ハーバード大学で比較動物学のアガシーの下で貝類研究を行い、さらに北米インディアン研究で実績のあるワイマンに師事、フロリダ、セント・ジョン貝塚発掘などに参加した経歴があった。モースは、北米インディアン研究のなかで、フロリダ・ニューイングランドの貝塚で発掘された食人が疑われる痕跡や、イロコイ族に食人風習伝承があることなどを学んでいる。この時代、欧米人類学考古学の研究動向は、民族交代による野蛮から未開、文明へと人類社会は「進化」し、西欧文明圏がそれを導くという社会進化論的パラ

ダイムが流布していた（モルガン 1877）。

モースは、日本で貝類調査を行うため、明治10年6月に横浜入港、7月には東京大学理学部生物学生物学教室教授に就任して、9月から大学予備門・生物学科・地質学科で授業を始めた。モースは、高等教育に欧米最新の進化論をもたらし、10月6日から3回行われた進化論講義は学生に衝撃を与えたという。さらに、進化論の一般講演が10月初め、東京大学講堂に一般聴衆500名を集めて行われている。

大森貝塚の発掘は、授業開始と同じ9月の16日に発掘調査を行い、教室助手ら3人とともに土器、骨器、獣骨を発見した。本山が読んだと思われる民間雑誌90号雑報の速報は、これを扱ったのだろう。

興味深いことに、第1回調査の時、モースは採集した人骨に傷があることに気が付き、「カニバル・ヴィレッジ（cannibal village=食人する人たちの村）を訪れてきた」と語ったことを、同行した村松任三が日記に記録しているという。貝塚上に立ったモースは、発掘品に北米インディアン貝塚と同じ証拠を見出したのだろう。9月29日にも訪れ、10月9日から本格的な発掘を行っている。

明治10（1877）年12月14日、文部大輔田中不二麿代理、文部少輔神田孝平は、内大臣三条実美に、モースが発掘した「府下大森村発見の古物」を、天皇が自ら実見する「天覧」に供するための上申をおこない、田中不二麿の名で「大森村古物発見の概記」が付された。明治10年12月20日東京教育博物館にて大森貝塚発掘品の明治天皇天覧があり、翌日の一般公開を、新聞記事にあったモースの日本の民族交代仮説を疑っている本山彦一も見学したのである。

モースは、東京大学で生物学を講義し大森貝塚を発掘したが、大学における高等教育で生物進化論を講義したことも重要である。モースの進化論は、あくまで生物進化を扱うものであったが、学生の理解力に感心している。明治12（1879）年1月5日には、帝国大学生物学会で講演している。

明治12年7月11日には、福澤諭吉の招きにより慶應義塾でモースが進化論を講義し、通訳は東京大学植物学教授の矢田部良吉がつとめた。講義は、実物と黒板に図を描くことで「自然淘汰の簡単な要因を学生たちに分からせようと努力」したものだだったという。

本山の加わる福澤諭吉門下、慶應義塾関係者には、モースの知己が多い。門下で東大講師の江木高遠は、明治11（1878）年6月30日、『なまいき新聞』発刊記念講演として、浅草に500人を超す聴衆を集め、考古学と大森貝塚発掘に関するエドワード・S・モースの講演会を開き、江木が通訳した。福澤はモースを東京学士院メンバーに推薦したことがある。

江木主催の講演会は、浅草須賀町井生村楼で開催された。そこでモースは、『大森村にて発見の前世界古器物』と題し、大森貝塚発掘に関する講演をおこない、考古学という学問の概要、天地創造の否定、世界の人類が歩んだ『旧石器時代』・『新石器時代』・『青銅器時代』・『鉄器時代』の区分、日本の大森貝塚が『新石器時代』に属することを述べた。また大森貝塚で出土した人骨に人為的な傷があって、肉をそぎ取った痕跡と考えられること、現在のアイヌ民族には食人風習がないから、「昔の日本には、アイヌとは別の人種が住んでいた」と推論した。

この講演内容は、江木の発行する『なまいき新聞』に掲載された。大森貝塚発掘時の新聞速報で本山が懐疑的であった部分が、ここでモースにより詳細に語られ、日本に民族交代があったこ

とが、考古学という新しい学問の研究成果として提示された。この講演会に、本山彦一はおそらく参加したのではないか。していないとしても掲載誌を購読したであろうし、慶應義塾門下として東洋議政会、三田派などでも江木と行動を共にしており、すぐに知るところとなつたであろう。そのモースの近代的科学の手法で提示された日本の石器時代の姿は、新しい学問の力として、本山を納得させるものであつたと思われる。

生物学者モースが、トムセンやラボックの先史時代を石器時代（旧石器時代・新石器時代）青銅器時代鉄器時代に区別することに準拠して、大森貝塚を新石器時代に属するとしたのは、日本の先史時代を世界の中に位置づけるものであり、既に旧石器時代という階梯を知る本山の視野を拡大させたのであろう。これが、本山に本当の意味の「考古趣味」を芽生えさせた契機と考える。大森貝塚発掘遺物の天覧を見学したときには、まだ懐疑的であつたのではなからうか。

江木主催講演会でのモース講演には、日本列島の先史時代人種交代説とともにもう一つ注目された話題がある。モースが最初の大森貝塚踏査から言及したという大森貝塚での「食人」行為である。

大森貝塚の発掘調査報告書では、

「大森貝塚に関連して最も興味ある発見の一つは、そこでみられた食人風習の証拠である。これは、日本に人喰い人種がいたことを、初めてしめす資料である。人骨は、イノシシ・シカその他の獣骨と混在した状況でみだされている。これらは獣骨と同様、すべて割れていた。これは、髓を得る目的か、その長さのままで煮るには土器が小さすぎるため、煮るに便利のように割つたのである。人骨各部分は、発見された際に、まったくばらばらであつた。……（中略）……ひっかいたり切りこんだりした傷がいちじるしい骨もある。これはことに、筋肉の付着面、すなわち苦勞して骨から筋肉をとり離さなければならない箇所に著しい。割れ方自体が、はっきり人為的とわかるものもあり、筋肉の付着面に深く切りこみをいれてあるものもある。……」（モース『大森貝塚』）

とする。さらに、日本の1500年以上も前から残された史料に、食人についての記述がないこと、有史以後の日本人に敬虔な埋葬文化があること、大森貝塚人が食人せざるを得ない極限状況（たとえば飢餓とか）に遭遇したとも考えにくいので、事例の追加を待ちたいとした。たとえ最も高い文明の種族であろうと、食物がじゅうぶんに供給されなければ、必然的に人を食べるという極限状況においこまれるとも記して、例外的な事例の可能性も示唆した。

今の縄文時代貝塚研究では、遺体の多くは埋葬されたもので、食人を疑われる例は極めて稀であることが知られているが、このときには、食人という行為が、モースの想定する日本列島先住民族：先アイヌ民族の特徴として取り上げられた。この食人行為の発表は、明治11（1878）年6月30日、江木の『なまいき新聞』発刊記念講演会の聴衆は、日本民族の前に民族交代があつたことと合わさって強烈なイメージを与えたいらしい。後で紹介するように、本山自身もダーウィンなどの書を学んだ机上の論説「人類相食論」で「上古草昧ノ時ニ方ツテ人皆穀類ヲ取獲スルヲ知ラズ獸ヲ獲テ養ヒ人ヲ殺メ饑ヲ癒ス」と記したことが、新来の学問である考古学の発見として自分の国にもあつたとされたのだから、驚いたにちがいない。一方で、その行為を行ったのが、先住民族であるアイヌ民族よりも前に駆逐された民族とするモースの仮説に、自分たちの直接の祖先の行為ではないからと安堵する心理もあつたのではなからうか。

3. 本山彦一「人類相食論」

福沢諭吉に師事し、慶應義塾に出入りを許された本山彦一は、租税寮に勤めながら、論客として頭角を顕す。明治10（1877）年、幕末に結ばれた不平等条約の改正を論じた論文は、租税寮に勤めて実務を知る本山が事実即して精密に論じたもので、モースが来日する直前、林正明の『近事評論』に掲載されて注目された。それが全文英訳されて『東京タイムス』に掲載されて大きな反響を呼び、本山は福澤門下の新鋭の論客として

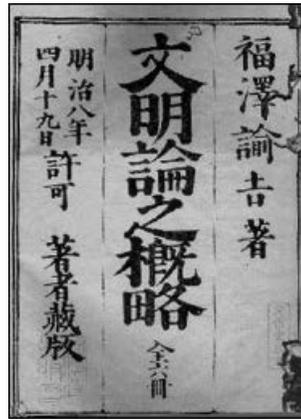


写真4 福澤諭吉 1875
『文明論之概略』



写真5 福澤諭吉

の初陣の飾った（大阪毎日新聞社 1929）。その後、扶桑新誌、郵便報知新聞などで論説を発表するが、特に慶應義塾出版社から発行されていた『民間雑誌』に矢継ぎ早に論説や報告を発表した。

モースが東京大学教授に就任するのとほぼ同時の7月22日付け『民間雑誌』第79号に、慶應義塾の所在地を冠した三田協義社所属本山名で論説「人類相食論」を発表する（本山 1877、末尾に翻刻収録）。10月7日付の第90号にはモースの大森貝塚発掘の速報が雑報として掲載されているが、本山は、モースの研究を知らずに「人類相食論」を執筆したことは間違いはないだろう。

「人類相食論」は、福澤諭吉に師事する青年本山の激論であり、多くの論点は福澤諭吉の論説に基調を一にする。「人類相食論」で筆者の興味を引いた部分を要約してまとめると、

「人生はわずかに50年ほどだが、……人が業を諦めず試み努力するのは、安全幸福の道を図るためだけのこと」からはじまる。「人は安心幸福を得ようと思うものである。一つの国なら、法律や道徳を整え安全幸福の地を得ようとしても、その国を呑もうとする国があったら、どんなに優れた法律道徳があったとしても無力である。実際の国際関係は、親睦と称し口で仁義を唱えていても虎や狼の争う場ではないか。その世界は、動物が食い合うようだ。」

「動物は生きるために他の動物を食う。強いものが弱いものを食うが、共食しているので、人を襲うことはない。人類は、お互いに助け合い福祉を増やすことが造物主の本意であって、人類の義務である。」

「しかしながら、万国は動物が食い合うように戦いを生じていて、その悲惨さは動物より千倍である。動物は爪や牙で争うが、国の戦争は武器があって、人の業と言えないような残酷な被害をもたらすのは、万物の霊長とは言えない。」

「人を殺す術に優れた者を英雄といい、土地を奪い略奪する者を豪傑というのだ。天下の英雄豪傑の名をあげれば、アレキサンダー大王、ナポレオン、豊臣秀吉、クビライがあがるが、この四人は英雄豪傑ではなく、ただの一匹の猛獣であるに過ぎない。」

「西欧の列強国がお互いに侵略し合ったことや、中国の歴代王朝が交代したことを述べようと思っただけだ。日本の歴史でも同様だ。死体と血まみれの大地に幸福安全の基盤を築くには、まず基本を究めて良くなっていく策を講じないといけない。」

「私は、戦争の種類を論ずるために古今、世界中の歴史書などを集めて研究したところ、四つの項目に分類できた。」

「第一項 古い時代農耕で穀物を生産しなかった時代には、動物を捕って食べ、飢えたときには人も殺して食べた。腕力で争い、弱肉強食の世界であって、争いは食べ物をめぐって起こることは、動物と同じであった。」

「第二項 農耕が始まって食料が豊かになってきて、食料をめぐる戦や争いは少なくなってくるが、名誉心という人間固有の性格が表れて、土地の支配を争うようになる。そして争いは集落間で起こり、人を殺して土地を奪い取ることが名誉心によって行われる。」

「第三項 知識や学術が進んで、人々の移動が活発になって、他国と交流して交易で利益が得られるようになって、戦争も大きく減少する。しかし、一方的な損得が問題になったとき、戦争が起こるようになる。今の各国の戦争はこの類である。戦争では人を殺し、財産を消費して、その被害は耐えられない。」

「第四項 権利や自由の言論が定着して、政治に党派の主張が分立し、政府と民心が離れたとき、論争では収まらなくなり、革命戦乱が起こることがある。国が進歩して、憲法を確立して政府の統治と人民の世論が並び立ったなら、人民と政府の内戦は起こらないだろう。」

「第一項第二項は、草昧未開の国の状態であって、現在発展している国では多くない。第三項第四項に属するのは、発展していくに従ってだんだん戦争は少なくなっていくのは自然の流れである。しかし、どうやったらこの争いが起こる流れを絶てるだろうか。じっとして待っているだけではいけない。その方法を真剣に考えるべきである。」

「戦争が起こらないようにするには、宗教を広めることもできるが、十字軍では最も残酷な戦争があった。公法を整備して国際交流をしても、武力を頼む国があれば意味がない。では国際間の緊張を避け、同胞の幸福を求めるには、どんな方法があるだろうか。それには、国の間の貿易を盛んにして両方が利益を揚げられるようにして、船舶を整え国同士の往来を盛んにし、国内では議院を開設して上下の政治談義を活発にして世論を高めるしか方法はない。そのようにできれば、外から戦争を仕掛けられず、内乱も起こらず、永く幸福安全の基礎を築けることは疑いがない。その理を究めて、その方法を広め駆使するのは、私たち学士の仕事である。」

であろうか。構成としては、演説原稿となっている。

まさに激論である。本山彦一の思想は、福澤諭吉に師事し、慶應義塾の学統に連なるものが窺えるが、ここでは諭吉の思想に深入りせず、筆者の興味を引く点のいくつかを指摘するに留めたい。

本山は、人の社会、国家に、禽獣が生きていくために弱肉強食、相食う様を見だし、そこから抜け出さないといけないとする。人殺し略奪、戦争、内乱、革命をなくし、「安全幸福」をもたらすには、国内では国会を開設して、人民の政治意識を高めて世論を形成、国家と人民が相互に意見のやりとりをすること、国際間では、船舶を整えて国同士の交流を活発にし、貿易でお互いが利

益を上げられるようにすることだという。論説のキーワードは、「人類相食」「安全幸福」である。この論説の直接の意図は、国会の開設が主眼であるようにも読める。さらに、それを主導するのは、人生50年を賭して、それに取り組んでいる私たち「学士」であるとする。

イギリスの哲学者・社会学者・倫理学者のハーバート・スペンサーは、『教育論』（1861）などで、独立自尊の人格形成には知育・徳育・体育の三育が独立した人格教育の基本原則であるとし、福沢諭吉が『学問のすゝめ』（1872）の中で紹介した。本山のいう「学士」は、福澤に師事し慶應義塾で学び、さらに社会を導こうとする、この人間像に近いかもしれない。スペンサーは、ダーウインの『種の起源』（1859）を受けて、適者生存を生物の進化に限らず、社会学や倫理学にも応用して議論を展開した。彼の著書『生物学の原理』（1864）や1876『社会学原理』（1876）は、福澤門下で講読されたらしい。

「凡ソ人ヲ殺スノ術ニ巧ミナル之ヲ英雄ト謂ヒ土地ヲ貪リテ飽カス之ヲ豪傑ト謂フ今夫レ天下ノ英雄豪傑ヲ問ヘバ歴山王拿佛翁豊太閤忽必烈人必ス先ツ指ヲ屈ス余以為ラク此四子ノ者何ソ英雄豪傑ト称スルニ足ラン只是レー匹ノ猛獸タルニ過キザルノミ」は、アレキサンダー大王、ナポレオン、豊臣秀吉、クビライを英雄豪傑ではないと罵倒する。維新の熱の冷めない明治10（1877）年を思えば驚愕すべき言説であろう。

本山が師事した福沢諭吉の『文明論之概略』（1875）は、世界の民族や国を「野蛮・半開・文明」の三段階に分類し、欧米諸国を文明、日本を半開、東アジアの周辺諸国をそれに遅れた存在と位置づけ、日本はその階梯を自力で登るべしとしたのは、社会進化論的な視点を取り入れているからだとされる。「人類相食論」の中で、本山彦一は「古今萬國ノ史乗ニ就テ其類ヲ集メ」、戦争の段階を四つに分類したが、この分類には福澤の三段階が影響しているのだろう。

そのうちの第一項は人類が穀物を栽培していない時代で、狩猟を行っていること、飢えたときには人を殺して食うこともあったとする。第二項は、農耕をはじめて食料が生産されて飢餓から解放されたが、土地や名誉心の争いが起こる時代とする。第一・二項は、福澤の「野蛮」の段階に相当するが、ここには農耕の有無が項を分けていて、欧米の旧石器時代新石器時代についての知見が反映している。本山の「人類相食論」には、石の道具、旧と新の石器時代という考古学的な時代区分の引用はないが、狩猟と農耕という生業基盤が人類の時代を分けるという明確な学説の引用があることは間違いない。第一項の飢餓状態での食人行為、第二項の農耕経済の土地の重要性、集落や民族間の抗争も明示されていることから、1865年のラボックによる石器時代区分や欧州の石器時代研究、モースの師事したワイマンによるフロリダ、セント・ジョン貝塚発掘などで発掘された食人が疑われる痕跡や、イロコイ族に食人風習伝承があることなどについて、取り寄せた書籍の購読で学ぶ機会があったからだと思う。アメリカ文化人類学の成果を反映したモルガンの『古代社会』（1877）は、同年の刊行なので間に合ったかどうかは分からない。

モースが大森貝塚を発掘する直前、本山彦一は「古今萬國ノ史乗ニ就テ其類ヲ集メ」「人類相食論」を執筆した。本山は欧米書籍から学ぶ明治維新时期の知識人として、国際的にも高い水準であったことは間違いない。江木主催の講演会でモースは、世界人類が歩んだ『旧石器時代』・『新石器時代』・『青銅器時代』・『鉄器時代』の区分、日本の大森貝塚が『新石器時代』に属することを述べたが、すでに本山は、旧石器時代新石器時代の本質を理解していたのである。

ただ本山は、欧米の学問がどのように研究を進めるのかを知らなかった。モースの大森貝塚発

鷹セアル、トチ此ニ猶アリ一匹ノ鼠ヲ捕ヘ基ヲ得意ノ色アリ
屠アリニ食ヒ終ラントス忽チ一犬飛ヒ來リ其猫ヲ食フ犬又
尾ヲ搖シ大ニ喜ビ林中ニ入りテ之ヲ食フ一狼アリ鵜ヲ食フ
鵜之ヲ食フ地味一鹿又其犬ヲ攫フ去ル而テ未ダ食ハス
又一豺アリ其食ヲ得ント欲シ相争ヒ相搏チ二匹未ダ一瞬チ
試ミス遠ニ地ニ斃ル見ル可シ之ヲ食フ者忽チ他ノ爲メニ食
ハレ之ヲ捕フル又自ラ人ニ捕ヘラルモ悟ラス悲ムヘキカ
ナ

西洋列國ノ相食ハ支那歷代ノ相食ニ殆ント連続ニ暇アラス
今我邦ノ事蹟ニ就テ之ヲ論セシモノ上古ハ始ク薑ギ保元ノ亂
後平氏源氏ヲ食ヒ源氏種ヲ起リ盡ク平氏ヲ噬ム而メ猶ホ未
ダ飽カス同族相害シ骨肉相食ミ殆ント子遺アルナシ是ニヨリ
後北條ノ權ヲ執ル足利ノ跋扈スル南北ノ相搏ツ甲越ノ相噬
ム以テ織田豐臣ニ至リ盛衰一ナラス獨リ徳川氏ハ最後ノ全
捷ヲ獲テ腹盈チ胃飽キ二百余年復チ吞噬ヲ逞クスルモノナ
シ一旦外船ノ内海ニ進入スルニ及ソテヤ一氣忽チ動キ内外
交々將キニ相搏噬セントシ勢外ニ及ハスシテ内ニ發シ遠ニ
維新ノ功ヲ定ム爾來騷亂一ナラス竹箱席旗ヲ以テ一縣ヲ噬
ントスル者アリ千軍萬馬ヲ驅テ一國ヲ吞ントスル者アリ現
猶今ニ至リテ猶ホ未ダ休マズ嗚呼此裂腹流血之地安得立幸
福安全之基乎哉先ツ其本ヲ究メテ其末ヲ善クスルノ道ヲ講
セシムルハアル可カラズ

類ヲ集メ概シテ左ノ四項ヲ得テリ
第一項上古皇味ノ時ニ方ツテ人皆穀類ヲ收獲スルヲ知ラズ
獸ヲ獲テ腹ヲ養ヒ人ヲ殺シ糧ヲ採ス故ニ只腕力ニ是ノ由リ
弱ノ内ハ強ノ食トナルヲ免レ争鬪止メ時ヲシ此戰ハ則チ

食料ヨリ起ルモノニシテ禽獸ノ相食ハト正ニ相似タリ
第二項耕作ノ術稍々開ク食物漸ク増殖スルハ戰争自ラ
減スルモノナリト雖モ人々次第ニ名譽心ヲ生シ各々其土地
ノ廣狹ヲ競ヒ其威力ノ強弱ヲ角スルニ至ル可シ是ニ於テカ
戰争ハ忽チ各部落ノ間ニ生ズルニ至ル可シ此戰争ハ則チ其
源因チ名譽心ニ歸スベシ名譽心ハ人間固有ノ性ナリト雖モ
僻スレバ則チ人ヲ殺シ土ヲ奪フニ至ル
第三項 知識稍々開ク學術益々進ミ人々往來ノ便ヲ得テ他
國ト交際シ有無相通シ長短相補ヒ彼此利益ヲ附ルチ以テ殺
伐ノ氣象自ラ退縮シ協和ノ心相發生シ偏ニ通商ノ利ヲ目的
トスルヲ以テ戰争大ニ減少ス然リト雖モ交際ノ間已ニ害ア
ツテ人ニ利アリ我ニ失アツテ彼ニ得アレバ各私慾ヲ披ミ偏
見ヲ張り互ニ屈セズ終ニ曲直ヲ干戈ニ決スルニ至ル是ニ於
テ戰ハ國ト國トノ間ニ起リ勝敗分レテ爭論始メテ止ム方今
各國ノ間ニ行ハルハ所ノ戰争多クハ此類ナリ而モ徒ラ人
命ヲ損傷シ財貨ヲ消費スル等其慘毒實ニ言フニ忍ビザルモ
ノアリ是豈ニ人生ノ希望スヘキ所ナランヤ况ンヤ勝敗ノ如
キモ強者ハ毎ニ曲ヲ以テ直チ倒シ弱者ハ是ヲ以テ非ニ壓セ
ラレ到底正理ノ必勝ヲ期ス可カラサルニ於テオヤ

第四項 權利自由ノ說稍々其勢ヲ得テ政治ノ議論各其黨派
ヲ分立シ或ハ政府ノ施政民心ニ乖戾シ舌戰筆闘血ヲ嘔キ腸
ヲ斷ツモ猶ホ其志ヲ達スルヲ能ハス竟ニ潰裂スル所トナリ
彈丸硝鎗以テ互ニ軋轢スルニ至ルモノアリ此類ノ戰争ハ時
々海外近世ノ史乘ニ散見シ或ハ之レカ爲メ制度面ヲ革メ好
果實ヲ結ビ而シ其情固ヨリ禽獸ノ相食ノ事ト異ナルモノアリ
ト雖モ其殘酷慘毒ノ狀ニ至リテハ甚ダ相異ナルモノアフス
若シ夫レ國歩上進シテ憲法確立シ政府ノ施政人民ノ輿論ト

並行スルニ至ラハ豈ニ人民政府相戰フ如キ慘劇ヲ社會ノ間ニ
演出スルニ至ラソヤ
是ニ由テ之ヲ觀レハ第二項ノ如キハ皇味未開ノ國ニ行ハ
ルハ所ニシテ今日文化昌隆ニ趨クノ時ニ於テ多クアツル
所ナリ第三四項ニ屬スルモノモ世運ノ開クルニ從ツテ次第
ニ減少スルハ自然ノ勢ナリト雖モ何ノ時代カ能ク其殘酷ヲ絶
ツニ至ルヘキヤ余輩慮慮ノ輒ク應辯シ能ハサル所ナリ况
ヤ手ヲ束テ口ヲ箝ツテ獨リ天命ヲ待ツモ恐シハ黃河ノ清ト
一般ナラン今ニ及ソテ勇奮魁屬此レガ害ヲ除キ利ヲ計ルノ
道ヲ講究セサル可カラズ
今夫レ戰争ノ際ヲ絶タント欲セバ宗教ヲ廣メテ以テ人心ヲ
和樂セシメンカ宗門ノ争ニ十字ノ軍アリ最モ殘酷ヲ極ム公
法ヲ整ヘテ交際ヲ厚シセンカ腕力ノ下金科玉條モ亦畫
餅ニ馬スニツノ者俱ニ用ヲ爲スニ足ラス然ラハ則チ何ノ策
カ以テ萬國ノ殺氣ヲ消シ同胞ノ幸福ヲ求メントスルカ曰ク
貿易ヲ昌盛ニシテ以テ利益相資ケ政談ヲ更張シテ以テ輿論
ヲ振起シ外ニハ則チ船舶ヲ備ニテ彼我往來ノ便ヲ謀リ内ニ
ハ則チ議院ヲ設ケテ上下ノ情ヲ通ズルノ道ヲ開クニアルノ
ニ果シテ此ノ如クナレバ外寇内亂其際ヲ絶テ永ク幸福安全
ノ基ヲ定ムルハ濠濠疑ヒアルトナシ然リ而シ其理ヲ究メ其
法ヲ講スルモノハ果シテ誰カ責ソ其レ只吾人學士ノ任ニ在
ルノミ

雜記

泰運士族之失敗

泰運實金數百圓ヲ得タリ之ヲ所儲セントスル甚ダ難シ或者
ハ農ヲラント云ヒ或者ハ商ヲラント欲シ或ハ之ヲ高利ニ貸
サン或ハ之ヲ銀行ニ預クント異說覺々更ニ定セザリシガ

し或ハ賣藥杯を服して安眠せんと企てども能く其病の原因を探りて其法方を求めざればり却て愈其睡眠を妨ぐるの媒と爲るゝ到る固じ此安眠を就かざる原因は頭部ニ血液の循環も烈敷して手足の冷ゆるより起るものなり手足冷ゆるをば從て睡眠を妨げ自然と心中ニ種々の想像を起こしめ終る寢らざるに到る由縁



るに此病を醫して安眠し就かんとするは、まづ手足を粗き手拭を以て摩擦し温暖ならしむると、さハ頭部の血液次第に手足に循環して必ひ暫時の眼を閉じ、さびとほり少時間を経て覺をい冷水或ハ濡き手拭を以て満身を拭ふべし然るときハ血液の循環全く平均し始めて眞の安眠に就くを得べしと或る有名なる洋醫の話しを記す

論 説

人類相食論

三田協義社 本山彦一
人生僅ニ五十年其間夙夜を繋ぎ繋ぎを極め身志是レ勞シ學術是レ究ム或ハ混沌タル上古ノ事ヲ思考シ幽昧ナル死

後事ヲ推算シ妄想斷其極ル所ヲ知ルコトナシ或ハ孤帆汎チ破テ茫々大洋ヲ渡リ單身謀テ開キテ遠シ無人ノ境ニ入リ嘗苦犯險曾テ畏避スルコトナク或ハ天ヲ測リ地ヲ量リ秘ヲ探リ興ヲ究ム或ハ氣ヲ馳テ虫ヲ厭フ理ヲ究メ性ヲ定ム而シ其業ヲ問ヘバ則チ曰ク宗教曰ク道德曰ク法律曰ク經濟曰ク商曰ク農曰ク工ト此等ノ諸業勉メテ倦マヌ汝ノ其事ニ從フモノハ果シテ何ノ心ヲヤ其甚蓋シ安全幸福ノ道ヲ計ルニ過ギザルニ

人間ノ心ヲ苦シメ身ヲ勞スル此ノ如シ而シ其避過スル所ノ事如何ヲ見ルニ樂少クシテ哀多ク常ニ悲痛慘怛ノ狀ヲ免レズ抑幸福安全ノ計果シ其目的ヲ達シヨル乎余一モ其可ヲ見ザルナリ若シ夫レ一國ニ於テ法律漸ク整ヒ道德稍ク修リ人ニ凶惡ナク行ヒ殘酷ナラズ略々安全幸福ノ地ヲ得ントスル時ニ當リ偶々擲擲ヲ逞シセントスル者アリ戰艦濤ヲ衝ヒテ來リ彈丸雨ノ如クニ飛ビ城拔ケ國亡ルニ及ンデハ談天說地ノ理、法律道德ノカモ亦徒爲ニ屬センノニ試ミニ萬國ノ交際ヲ見ニ其名ハ響騰ト稱シ口仁談ヲ唱フルモ退テ其實況ヲ顧レハ恰モ虎狼噬ノ一爭場ノ如シ嗚呼人類ヲ幸キテ腥膻血河ニ入レシメントスル果シテ誰カ心ヲ是レ豈ニ造物主ノ意ナランヤ

夫レ禽獸ノ相食ムヤ其口腹ヲ養ハシカガメニシテ之レニ非ハレハ以テ其生ヲ保ツコトヲナス故ニ深林幽谷ノ中ニ生スル獸類ハ自ラ天賦ノ爪牙銳利ニシテ其爪以テ肉ヲ劈クニ足リ其牙以テ骨ヲ噬ムニ足レ因テ生物ヲ殺シテ之ヲ食フ虎狼ノ如キモノ即チ是ナリ要スルニ天性ニ從フニ且夫レ強ノ弱ヲ食ヒ大ノ小ヲ吞ミ又強強ト爭ヒ大亦大ト闘ヒ互ヒニ相殺傷スルコトナクシテ則チ猛獸勢ヲ待テ跋扈人ニ迫ル人間殆ト

之ヲ除クニ苦シヤサルヲ得ヌ由是之ヲ觀レハ山ニ豺狼アリ虎豹アリテ互ニ相殺生スル者ハ造物主人類ノ爲メニ其害ヲ防ク所以ニアラスヤ然ラハ則チ特ニ人類ニ至テハ仁義以テ相突リ正實以テ相接シ内ハ父子兄弟ノ親ニ外ハ白人黒奴ノ別ナク相恤ミ相實ケ以テ福祉ヲ増ス者ハ是レ造物主ノ本意ニシテ亦余輩人類ノ義務ニアラスヤ

然リト雖モ古今萬國常ニ豐シ生計ヲ構ニ禽獸相食ムノ所爲ニ倣ヒ而シ其悲痛慘怛ノ狀ニ至リテハ却テ之レニ千百倍スルモノアリ人ヲ以テ獸ニ如カサルベクンヤ禽獸ハ口腹ヲ養フカ爲メニ天賦ノ爪牙ヲ用ユルニ過ギズ人類ニ至リテハ則チ然ラス禽獸ヲ殺シ采殺ヲ収メ食既ニ餘リ有リ生計モ亦安シ何カ故ニ干戈ヲ弄メ同類相殺傷スルコトヲナスヤ嗚呼已レノ手以テ之ヲ擲クニ足ラス已レノ齒以テ之レヲ噬ムニ足ラス各國統ツテ人ヲ殺スノ具ヲ製シ互ニ其精巧ニ誇リ銳利ノ刀槍ハ以テ牙ニ代ヘ激烈ノ銃彈ハ以テ爪ニ代ヘ一刀兩斷手足處ヲ異ニシ裂丸一發數百人ヲ斃シ手ヲ拍チ快ト呼フヤ稱メ人間ノ所爲ト云ヒ之ヲ尊ンテ萬物ノ靈ト云フ可ナラシカ

凡ツ人ヲ殺スル術ニ巧ミナル之ヲ英雄ト謂ヒ土地ヲ食リテ飽カス之ヲ豪傑ト謂フ今夫レ天下ノ英雄豪傑ヲ問ヘば歷山王拿佛翁豐大開忽必烈人必ス先ツ指テ屈ス余以爲ラシ此四子ノ者何シ英雄豪傑ト稱スルニ足ラン只是レ一匹ノ猛獸タルニ過ギザルノミ一ハ則チ毛鬣ヲ蔽フテ横ニ臥シ其體單獨一ハ則チ戎衣ヲ服シ堅ニ立チ其體集合所謂步兵騎兵ハ其爪牙ナリ所謂兇惡兇候ハ其耳目ナリ其進退ハ則チ馳走ノ

其等令ハ則チ咆哮ノミ戰勝テハ則チ自ら謀ヲ得タリト爲シ揚揚自得ノ色ヲ見リ何ゾ知ラシ身モ亦早晩カ他族ノ爲メニ擄

4. 本山彦一のその後

「人類相食論」を執筆した本山彦一は、福澤諭吉と慶應義塾の学統、「幸福安全」を追い求める新進気鋭の論客として活躍をはじめ。国の間の貿易を盛んにして両方が利益をあげ、船舶を整え国同士の往來を盛んにし、国内では議院を開設して上下の政治談義を活発にして世論を高めることに尽力する。そのようにできれば、外から戦争を仕掛けられず、内乱も起こらず、永く「幸福安全」の基礎を築けるであろうと考え、明治14（1881）年、英国流の漸進的な改革を指向し、尾崎行雄・犬養毅・江木高遠らと東洋議政会（とうようぎせいかい）を結社するなど、さまざまな活動を開始する。

明治19（1886）年、本山は、藤田伝三郎男爵率いる藤田組に入社し、明治32（1899）年、岡山県児島湾干拓の支配人を勤める。岡山県には、縄文時代貝塚が点在していたことから、考古学趣味が再燃したようで、明治36年ころ東京人類学会会員となる。

明治37（1904）年に児島湾汐留工事は完了。その後、児島湾干拓工事の部下であった東輝文から、彌生式小形土器 1個：備前国上道郡高島採集を寄贈される。この頃から、本山の考古学資料の蒐集が始まった可能性がある。東からは、大正時代初期にも土器片2点：岡山市岡村有城岡の塚貝塚採集が寄贈されている。

本山が大阪毎日新聞社社長となってからの新聞経営、大毎慈善団や富民協会などの社会慈善事業、手厚い学術後援については、すでに言及したことがあるので繰り返さないが、その精神的基盤は「人類相食論」にある「幸福安全」の希求であることが、新たに判明したことを付記する。

昭和4（1929）年11月3日、本山はモースの発掘した大森貝塚に記念の石碑を建立する発起人となり、大山柏、小金井良精、佐々木忠次郎など考古学人類学の代表的学者とともに除幕式に参列する。「人類相食論」の著者本山にとっての大森貝塚発掘の衝撃は、その時には回顧して述べられることはなかったようだ。

おわりに

最後に、本山の手控えと大森貝塚発掘の時系列を読み解いてみたい。「余ハソソナコトガ、ドウシテ解ルモノカト、實ハ嘲り居タル程ナリ。然レドモ余ハ其頃ヨリコレニ関スル趣味ヲ覚ユルニ至レリ。」と手控えにある「其頃ヨリコレニ関スル趣味ヲ覚ユル」と「其後其発掘品ハ上野博物館ニ陳列セラレタルヲ實見シタリ。」の二箇所である。趣味を覚えたことについての記述が先に、天覧展示を見に行ったことが後に書かれているが、このままでは本山の思考の流れがたどれないのである。

時間的流れは、

- 1 明治10（1877）年6月、「米国人モールズ氏が、地質学教師トシテ東京大學ニ聘セラレ、横濱ニ上陸、汽車ニテ東京ニ入ル途中、大森邊ニテ、石器時代ノ遺蹟アルヲ認め」
- 2 7月22日、本山彦一「人類相食論」民間雑誌第79号に掲載。
- 3 10月7日、大森貝塚発掘速報『民間雑誌』90号収録雑報に掲載、翌日8日『東京日日新聞』

転載。

- 4 これを本山彦一が読んで、分かるはずがないと嘲る。
- 5 明治10年12月20日、東京教育博物館にて大森貝塚発掘品の明治天皇天覧。
- 6 翌日一般公開を本山彦一見学。
- 7 明治11（1878）年6月30日、『なまいき新聞』発刊記念講演。モース大森貝塚の成果講演。となる。「其頃ヨリコレニ関スル趣味ヲ覚ユル」が手控えでは先に記述されているが、時系列では、7 明治11年の講演を聴講しないと嘲りが解消されないので、6 明治10年12月の天覧展示見学と記述が入れ代わっているのではないだろうか。「其頃ヨリ」はしばらく時間をおいてから、「其後」はすぐに、という時間経過が、手控えでは逆転していると推測する。

本稿では、今まで埋もれていた本山彦一の論説「人類相食論」を発掘、本山彦一の激論を翻刻収録した。その内容は、明治初期、維新直後の知識人の論説として奥深く多岐にわたっていて、科学史や近現代的思想としても興味深いものであった。本山は、福澤諭吉門下、慶應義塾の学統に連なる論者としては傍流の扱いをされることも多いが、福澤諭吉の思想を継承し、さらに自身が付与展開した知見と構想は、明治10（1877）年という時空間で考えると瞠目に値する。関西大学博物館が蔵する考古学資料「本山コレクション」を形成した本山彦一の「考古趣味」がどこに起源があったかを解明するため、本稿を用意したが、筆者にとって、明治期近代的啓蒙思想の発現として予想外の論説であった。本山彦一の思想と事蹟について、この「人類相食論」を出発点として、広い分野で再検討がなされることを願ってやまない。

本稿をまとめるにあたり、斎藤安輝氏、合田茂伸氏、山下大輔氏、そのほか関西大学博物館の諸兄にさまざまにご教示をいただいたことを感謝いたします。

本稿は、関西大学博物館2023年度「本山コレクション貝塚研究班」で行った研究成果の一部である。

引用参考文献

- エドワード・モース 『日本、その日その日』（原題：Japan Day by Day1917）
大阪毎日新聞社 1929 『本稿本山彦一翁傳』
関西大学なにわ大阪研究センター 2020 『なにわ大阪と本山彦一』
近藤義郎・佐原真編訳 1983 『大森貝塚』E・S・モース著
慶應義塾出版社 1877a 『民間雑誌』第79号 1877年7月22日刊
慶應義塾出版社 1877b 『民間雑誌』第90号 1877年10月7日刊
史前学会 1929 『史前学雑誌建碑記念号』
末永雅雄 1935 『本山考古室要録』
福澤諭吉 1872 『学問のすゝめ』
福澤諭吉 1875 『文明論之概略』
ダーウイン1859 『種の起源』
ダーウイン1871 『人間の由来』
ハーバート・スペンサー 1851 『社会静学』尾崎行雄訳1877

ハーバート・スペンサー 1864 『生物学の原理』
ハーバート・スペンサー 1876 『社会学原理』
パーレー・ピーター 1872 『萬國史』
本山彦一 1877a 「租税論」『近事評論』 転載英訳『東京タイムス』
本山彦一 1877b 「人類相食論」『民間雑誌』 第79号
モルガン 1877 『古代社会』
故本山社長伝記編纂委員会 1937 『松陰本山彦一翁』
山口卓也 2020 「財団法人富民協会と農業博物館・本山考古室」『なにわ大阪と本山彦一』

民間雑誌 第79号 明治10(1877)年7月22日 第四日曜日 本紙定価 一部4銭
慶應義塾出版 仮編集人 飯田平作 印刷人 朝吹英二

論説 人類相食論 三田協義社 本山彦一

人生僅ニ五十年其間夙ニ起キ夜ニ寝テ營々栖々身志是レ勞シ學術是レ究メ或ハ混沌タル上古ノ事ヲ思考シ幽昧ナル死後ノ事ヲ推算シ妄想臆斷其極ル所ヲ知ルコトナシ或ハ孤帆浪ヲ破テ茫々タル大洋ヲ渡リ单身棘ヲ開キテ遠ク無人ノ境ニ入り嘗苦險犯會テ畏避スルコトナク或ハ天ヲ測リ地ヲ量リ秘ヲ探リ奥ヲ究メ或ハ氣ヲ驗シ虫ヲ照シ理ヲ究メ性ヲ定ム而シテ其業ヲ問ヘバ則チ曰ク宗教曰ク道德曰ク法律曰ク經濟曰商曰農曰工ト此等ノ諸業勉メテ倦マス孜々其事ニ従フモノハ果シテ何ノ心ゾヤ其意蓋シ安全幸福ノ道ヲ計ルニ過ギザノミ

人間ノ心ヲ苦シメ身ヲ勞スル此ノ如シ而シテ其遭遇スル所ノ事如何ヲ見ルニ樂少クシテ哀多ク常ニ悲痛慘胆ノ状ヲ免レズ抑幸福安全ノ計果シテ其目的ヲ達シタル乎余一モ其可ヲ見ザルナリ若シ夫レー国ニ於テ法律漸ク整ヒ道德稍ク修リ人ニ凶悪ナク行ヒ残酷ナラズ略々安全幸福ノ地ヲ得ントスルノ時ニ當リ偶々捕噬ヲ逞クセントスル者アリ戰艦濤ヲ衝ヒテ來タリ彈丸雨ノ如クニ飛ビ城拔ケ國亡ルニ及ンデハ談天説地ノ理法律道德ノ力モ亦徒為ニ属センノミ試ミニ萬國ノ交際ヲ見ヨ其名ハ親睦ト稱シ口仁義ヲ唱フルモ退テ其實況ヲ顧レハ恰モ虎吞狼驅ノ一争場ノ如シ嗚呼人類ヲ牽キテ眼屈血河ニ入レシメントスル果シテ誰ガ心ソヤ是レ豈ニ造物主ノ意ナランヤ

夫レ禽獸ノ相食ムヤ其口腹ヲ養ハンカ為ニシテ之レニ非サレハ以テ其生ヲ保ツコトアタハス故ニ深林幽谷ノ中ニ生スル獸類ハ自ラ天賦ノ爪牙鋭利ニシテ其爪以テ肉ヲ劈クニ足り其牙以テ骨ヲ噬ムニ足ル因テ生物ヲ殺メ之ヲ食フ虎狼ノ如キモノ即是ナリ要スルニ天性ニ従フノミ且夫レ強ノ弱ヲ食ヒ大ノ小ヲ吞ミ又強、強ト闘ヒ大亦大ト闘ヒ互ヒニ相殺傷スルコトナケレバ則チ猛獸勢ヲ得テ跋扈人ニ迫ル人間殆ント之ヲ除クニ苦シマサルヲ得ス由是之ヲ觀レハ山ニ豺狼アリ虎豹アリテ互ニ相殺生スル者ハ造物主人類ノ為メニ其害ヲ防ク所以ニアラスヤ然ラハ則特ニ人類ニ至テハ

仁義以テ相交正實以テ相接シ内ハ父子兄弟ノ親ヨリ外ハ白人黒奴ノ別ナク相恤ミ相資ケ以テ福祉ヲ増ス者ハ是レ造物主ノ本意ニシテ亦余輩人類ノ義務ニアラスヤ

然リト雖モ古今萬國常ニ□ヲ生ジ戦ヲ構エ禽獸相食ムノ所為ニ倣ヒ而テ其悲痛慘劇ノ状ニ至リテハ却テ之レニ千百倍スルモノアリ人ヲ以テ獸ニ如カサルベケンヤ禽獸ハ口腹ヲ養フガ為メニ天稟ノ爪牙ヲ用ユルニ過キズ人類ニ至リテハ則チ然ラス禽獸ヲ狩シ禾穀テ取メ食既ニ餘リ生計モ亦安シ何カ故ニ干戈ヲ弄メ同類相殺傷スルコトヲナスヤ嗚呼已レノ手以テ之ヲ縛ツニ足ラス已ノ齒以テ之レヲ噬ムニ足ラス各國競フテ人ヲ殺スノ具ヲ製シ互ニ其精巧ニ誇リ鋭利ノ刀槍ハ以テ牙ニ代ヘ激烈ノ銃彈ハ以テ爪ニ代ヘ一刀兩断手足處ヲ異ニシ裂丸一發数百人ヲ斃シ手ヲ拍チ快ト呼フ之ヲ稱シテ人間ノ所為ト云ヒ之ヲ尊ンテ萬物ノ靈ト云フ可ナランカ

凡ツ人ヲ殺スノ術ニ巧ミナル之ヲ英雄ト謂ヒ土地ヲ貪リテ飽カス之ヲ豪傑ト謂フ今夫レ天下ノ英雄豪傑ヲ問ヘバ歴山王拿佛翁豊太閤忽必烈人必ス先ツ指ヲ屈ス余以為ラク此四子ノ者何ソ英雄豪傑ト称スルニ足ラン只是レー匹ノ猛獸タルニ過キザルノミーハ則チ毛毳ヲ蔽フテ横ニ臥シ其體単獨一ハ則チ戎衣ヲ服シテ豎ニ立チ其體衆合所謂ル歩兵騎兵ハ其爪牙ナリ所謂ル巡査斥候ハ其耳目ナリ其進退ハ則チ跳走ノミ其号令ハ則チ咆哮ノミ戰勝テハ則チ自ラ謀ヲ得タリト為シ揚揚自得ノ色アリ何ソ知ラン身モ亦早晚カ他族ノ為メニ搏噬セラルルコトヲ此ニ猫アリ一匹ノ鼠ヲ捕ヘ甚ク得意ノ色アリ將サニ食ヒ終ラントス忽チ一犬飛ヒ來リ其猫ヲ食フ犬又尾ヲ揺シ大ヒニ喜ヒ林中ニ入りテ之ヲ食フ一狼アリ□ヲ負ツテ之ヲ窺フ咆哮一聲又其犬ヲ攫シテ去ル而シテ未タ食ハス又一豺アリ其食ヲ得ント欲シ相争ヒ相搏テ二匹未ター喫ヲ試ミス遂ニ地ニ斃ル見ル可シ之ヲ食フ者忽チ他ノ為メニ食ハレ之ヲ捕フル又自ラ人ニ捕ヘラルルヲ悟ラス悲シムヘキカナ

西洋列國ノ相食ム支那歴代ノ相噬ム殆ント縷述ニ暇アラス今我邦ノ事蹟ニ就テ之ヲ論センニ上古ハ姑ク置キ保元ノ乱後平氏源氏ヲ食ヒ源氏踵ヲ起リ盡ク平氏ヲ噬ム而シテ猶ホ未タ飽カス同族相害シ骨肉相食ミ殆ント子遺アルナシ是ヨリ後北條ノ權ヲ執ル足利ノ跋扈スル南北ノ相搏ツ甲越ノ相噬ム以テ織田豊臣ニ至リ盛衰一ナラス獨リ徳川氏ハ最後ノ全捷ヲ獲テ腹盈チ胃飽キ二百余年復タ吞噬ヲ逞クスルモノナシー一旦外舶ノ内海ニ進入スルニ及ンテヤー氣忽チ動キ内外交々將サニ相捕噬セントシ勢外ニ及バスシテ内ニ發シ遂ニ維新ノ功ヲ定ム爾來騷乱一ナラス竹槍蓆旗ヲ以テ一縣ヲ噬ントスル者アリ千軍萬馬ヲ駈テ一國ヲ吞ントスル者アリ覬覦今ニ至リテ猶ホ未ダ休マズ嗚呼此屍澆血ノ地安得立幸福安全ノ基乎哉先ツ基本ヲ究メテ其末ヲ善クスルノ道ヲ講セスンバアル可カラズ

余嘗テ戦争ノ種類ヲ論ゼント欲シ古今萬國ノ史乘ニ就テ其類ヲ集メ概ソ左ノ四項ヲ得タリ

第一項 上古草昧ノ時ニ方ツテ人皆穀類ヲ取獲スルヲ知ラズ獸ヲ獲テ腹ヲ養ヒ人ヲ殺メ饑ヲ癒ス故ニ只腕力ニ是レ由リ弱ノ肉ハ強ノ食トナルヲ免レズ争鬪止ム時ナシ此戦ハ則チ食料ヨリ起ルモノニシテ禽獸ノ相食ムト正ニ相似タリ

第二項 耕作ノ術稍々開ケ食物漸ク増殖スルトキハ戦争自ヲ減スルモノナリト雖モ人々次第二名譽心ヲ生ジ各々其土地ノ廣狭ヲ競ヒ其威力ノ強弱ヲ角スルニ至ル可シ是ニ於テカ戦争ハ忽チ各部落ノ間ニ生ズルニ至ル可シ此戦争ハ則チ其原因ヲ名譽心ニ歸スベシ名譽心ハ人間固有ノ性ナリト雖モ僻スレバ則チ人ヲ殺シ土ヲ奪フニ至ル

第三項 知識稍々開ケ學術益々進ミ人々往來ノ便ヲ得テ他國ト交際シ有無相通ジ長短相補ヒ彼此利益ヲ得ルヲ以テ殺伐ノ氣象自ラ退縮シ協和ノ心相發生シ偏ニ通商ノ利ヲ目的トスルヲ以テ戦争

大ニ減少ス然リト雖モ交際ノ間已ニ害アツテ人ニ利アリ我ニ失アツテ彼ニ得アレバ各私意ヲ挟ミ偏見ヲ張り互ニ屈セズ終ニ曲直ヲ干戈ニ決スルニ至ル是ニ於テ戦ハ國と國トノ間ニ起リ勝敗分レテ争論始メテ止ム方今各國ノ間ニ行ハル所ノ戦争多クハ此類ナリ而モ徒ラニ人命ヲ損傷シ財貨ヲ消費スル等其惨毒實ニ言フニ忍ビザルモノアリ是豈ニ人生ノ希望スヘキ所ナランヤ況ヤ勝敗ノ如キモ強者ハ毎ニ曲ヲ以テ直ヲ倒シ弱者ハ是ヲ以テ非ニ圧セラレ到底正理ノ必勝ヲ期ス可カラサルニ於テオヤ

第四項 権利自由ノ説稍々其勢ヲ得テ政治ノ識論各其黨派ヲ分立シ或ハ政府ノ施治民心ニ乖戾シ舌戦筆闘血ヲ嘔キ腸ヲ断ツモ猶ホ其志テ達スルコト能ハス竟ニ潰裂スル所トナリ彈丸硝薬以テ互ニ軋轢スルニ至ルモノアリ此類ノ戦争ハ時々海外近世ノ史乘ニ散見シ或ハ之レカヲ為メ制度血ヲ革メ好果實ヲ結ビ而シテ其情固ヨリ禽獸相食ノ事ト異ナルモノアリト雖モ其残酷惨虐ノ状ニ至リテハ甚ク相異ナルモノアラス若シ夫レ國歩上進シテ憲法確立シ政府ノ施治人民ノ輿論ト並行スルニ至ラハ豈人民政府相戦フ如キ惨劇ヲ社會ノ間ニ演出スルニ至ランヤ

是ニ由テ之ヲ觀レハ第一二項ノ如キハ草昧未開ノ國ニ行ハル所ニシテ今日文化昌盛ニ趨クノ時ニ於テ多クアラザル所ナリ第三四項に属スルモノモ世運ノ開クルニ從ツテ次第ニ減少スルハ自然ノ勢ナリト雖モ何ノ時代ガ能ク其蹤ヲ絶ツニ至ルヘキヤ余輩識慮ノ輒ク臆断シ能ハサル所ナリ況ヤ手ヲ束ネ口ヲ箝シテ獨リ天命ヲ待ツモ恐クハ黄河ノ清ト一般ナラン今ニ及ンテ勇奮勉勵此レガ害ヲ除キ利ヲ計ルノ道ヲ講究セルヲ可カラス

今夫レ戦争ノ蹤ヲ絶タント欲セバ宗教ヲ廣メテ以テ人心ヲ和樂セシメンカ宗門ノ争ニ十字ノ軍アリ最モ残酷ヲ極ム公法ヲ整ヘテ以テ交際ヲ厚クセンカ腕力ノ下金科玉條モ亦画餅ニ属スニツノ者俱ニ用ヲ為スニ足ラス然ラハ則チ何ノ策カ以テ萬國ノ殺氣ヲ消シ同胞ノ幸福ヲ求メントスルカ曰ク貿易ヲ昌盛ニシテ以テ利益相資ケ政談ヲ更張シテ以テ輿論ヲ振起シ外ニハ則チ船舶ヲ備エテ彼我往來ノ便ヲ謀リ内ニハ則チ議院ヲ設ケテ上下ノ情ヲ通ズルノ道ヲ開クニアルノミ果シテ此ノ如クナレバ外寇内乱其蹤ヲ絶チ永ク幸福安全ノ基ヲ定ムルハ豪モ疑ヒアルコトナシ然而シテ其理ヲ究メ其法ヲ講スルモノハ果シテ誰カ責ソ其レ只吾人學士ノ任ニ在ルノミ

翻刻には、斎藤安輝 産業技術短期大学准教授の助力を得た。旧漢字旧仮名については、一部置き換えた。判読できない文字は□とした。句読点は配していない。判読に誤りがあれば、山口の責である。